

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	高橋 慧
2. 審査委員	主査：(岡山大学 教授) 西山 修 副主査：(兵庫教育大学 教授) 名須川知子 委員：(鳴門教育大学 教授) 田村 隆宏 委員：(鳴門教育大学 教授) 久我 直人 委員：(岡山大学 教授) 吉利 宗久
3. 論文題目 保育実践における造形と音楽を結び付けた表現活動の定位と展開	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 高橋 慧 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第 16 条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和2年2月11日(火)15時45分～16時15分 場所：岡山大学教育学部東棟3階1308室 1. 学位論文の構成と概要 第1章 複数表現領域を結び付けた表現活動に関する先行研究概観と本論の位置付け 第1節 研究の目的及び研究課題 第2節 芸術活動における表現領域の結び付き 第3節 幼児教育・保育における表現領域の結び付き 第4節 表現領域の結び付きと子どもの発達の特性 第5節 研究の方法と論文の構成 第2章 保育における造形と音楽を結び付けた表現活動の位置付け 第1節 研究範囲の焦点化と課題の抽出 第2節 造形と音楽を結び付けた表現活動が子どもに与える影響に関する保育者の認識 第3節 子どもの自由遊びにおける造形と音楽を結び付けた表現活動の出現 第4節 子どもの自由遊びにおける造形と音楽の結び付きの多様性 第3章 保育者から見た造形と音楽を結び付けた保育実践 第1節 造形と音楽を結び付けた表現活動に関する実践案 第2節 保育者に見る造形表現及び音楽表現に関する表現指導の自信度 第3節 造形と音楽を結び付けた表現活動に関する実践上の条件 第4節 実現可能性の捉えから見た実践上の条件 第4章 研究の総括と今後の課題 第1節 複数表現領域を結び付けた表現活動の特徴とその価値 第2節 複数表現領域を結び付けた表現活動における造形と音楽を結び付けた表現活動の位置付け 第3節 保育実践における造形と音楽を結び付けた表現活動の可能性	

第4節 造形と音楽を結び付けた表現活動の展望

引用文献

資料

「風景を見て絵を描く」「伴奏に合わせて歌を歌う」というように、造形表現、音楽表現、身体表現、言語表現といった各表現領域内で行われる活動は、人の表現活動として一般的によく知られている。一方で、「音のイメージを絵に描く」「絵を描きながら物語を語る」等、1つの活動に複数の表現領域が重なり合って展開される表現が存在する。表現領域が完全に独立せず、それら複数の領域が結び付いた状態で表現が行われる特性を見出せる。このような表現活動は、子どもや芸術家に見出され、本論では「複数表現領域を結び付けた表現活動」として論じる。子どもの表現活動が表現領域間の相互作用を含むことについて理解が進んでいる中、幼児教育・保育におけるこの分野の研究の位置付けはより重要になると考えられる。一方で、先行研究が少ない分野であり、保育現場を対象とした研究の必要性や実証的研究の不足が認められる。

そこで本論では、幼稚園等の保育現場における乳幼児期の子どもの表現活動について、上述した複数表現領域を結び付けた表現活動という主題から接近し、造形と音楽の結び付きを中心としながら、子どもの表現及び保育者による表現実践の実態を明らかにする。また、子どもの芸術活動を豊かにし得る1つの表現形態として、造形と音楽を関連付けながら展開する保育実践の望ましい在り方について探ることを目的とする。

第1章では、本論の背景と先行研究概観を示しながら、研究上の課題を抽出する。第1節では、本論の目的及び研究課題として、子どもの表現及び園での保育実践における複数表現領域を結び付けた表現活動の位置付けの整理、保育における造形と音楽を結び付けた表現活動に着目する妥当性の検討、造形と音楽を結び付けた表現活動が子どもに与える影響に関する検討と子どもの自由遊びに見る実態把握、及び、造形と音楽を結び付けた表現活動に関する実践案や保育者の特性に関する検討、の4項目を提示する。第2節では、児童期の芸術活動における事例と、芸術家の表現過程における事例を取り上げ、広く人の芸術活動における表現領域の結び付きの位置付けについて論じる。第3節では、複数表現領域を結び付けた子どもの表現活動の事例を概観する。また、保育関係者に焦点を当てた先行研究を示す。第4節では、複数の表現領域を結び付ける子どもの活動と、その背景にある発達特性について取り上げる。第5節では、本論で扱う現職幼稚園教諭を対象とした大規模調査データや研究方法を説明するとともに、本論の章立てを示し全体の構成を明示する。

第2章では、造形と音楽の結び付きを主題として、子どもの表現活動や保育者の認識を示す。第1節では、造形・音楽・身体・言語表現の4領域の中でも、造形と音楽の結び付きに研究上の焦点を当てる必要性を示す。第2節では、造形と音楽を結び付けた表現活動が子どもに与える影響について、肯定的な認識が多くの保育者に見られる状況を明らかにする。第3節では、子どもの自由遊びにおける、造形と音楽の結び付きの出現について取り上げる。第4節では、第3節の内容に引き続き、造形活動と音楽活動はどのように組み合わせられているのか、そして、結び付きやすい両者の組み合わせはどのような活動であるのかについて明らかにする。

第3章では、保育者による設定保育における造形と音楽を結び付けた保育実践を取り上げる。第1節では、造形と音楽の結び付きは、設定保育においてどのような実践として保育者によって展開され得るのかを、保育者から収集した実践案の類型化とともに示す。第2節では、造形と音楽を結び付けた保育実践を行う上で、造形が得意な保育者に適性があるのか、音楽が得意な保育者に適性があるのか等の観点から、実践実現性の高い保育者について示す。第3節では、設定保育において保育者に求められる保育実践上の条件が、どのようなものであるかを明らかにし、第4節では、造形と音楽の結び付きに対する実践の見通しが高い保育者と、実践の見通しが低い保育者を比較しながら、両者が述べる実践上の条件の違いについて明らかにする。

第4章では、得られた研究成果を総括し、今後の研究課題及び展望を示す。第1節では、複数表現領域を結び付けた表現活動が、芸術活動において1つの表現形式として成立し得る意義のある活動であることを論拠付ける。第2節では、保育者に対する調査に基づき、造形と音楽を結び付けた表現活動に見出せる価値や意義について振り返る。また、子どもの自由遊びにおいて、多方面での造形活動と音楽活動の結び付きが見られる実

態について振り返る。第3節では、造形と音楽を結び付けた表現活動として、実現可能な多様な実践案のバリエーションが示されたことや、造形・音楽それぞれに対する保育者の実践上の自信との関連性、保育実践を展開する上での諸条件について総括する。第4節では、今後の研究課題と展望について提起する。

2. 審査経過

本論の主要部分は、6編の査読付き学術論文として全国レベルの学会誌である『大学美術教育学会誌』（大学美術教育学会）に2編、『美術教育学研究』（大学美術教育学会）に2編、『美術教育学』（美術科教育学会）に2編掲載され高い評価を得ている。そのうち4編は、最近5年以内に発表している。これらの研究成果と内容についての審査を踏まえ、5名の審査委員が留意して討議した諸点は、以下の通りである。

(1) 研究目的と論文構成の整合性について

本論の目的は、子どもの表現活動について、複数表現領域を結び付けた表現活動という主題から接近し、造形と音楽の結び付きを中心としながら、子どもの表現及び保育者による表現実践の実態を明らかにすると同時に、子どもの表現形態として、造形と音楽を関連付けながら展開する保育実践の望ましい在り方について検討することである。本論は、現職保育者に対する広範囲の質問紙調査を行い、保育における造形と音楽を結び付けた表現活動の位置付け、保育実践、及び可能性を検討しており、研究目的に整合する構成になっている。

(2) 先行研究の概観と考察に使用された資料の扱いについて

本論は、従来の研究領域の隙間を埋める研究と言える。複数表現領域を結び付けた表現活動に関する先行研究の概観では、芸術活動における表現領域の結び付きと、保育における表現領域の結び付きに関する研究、表現領域の結び付きと子どもの発達に関する研究を整理した上で、本論の位置付けと研究意義を明示している。考察では、先行の研究資料を用いながら、得られた成果と幼児教育・保育における寄与について論考している。よって、研究資料の質・量、扱い方共に、学位論文の水準にあると判断できる。

(3) 分析と考察における客観性及び論理的な文章表現について

分析、考察ともに総じて、主観的恣意的な記述を排除し、科学的な解釈や論理的な文章表現への配慮が認められる。分析では、適宜、統計的検定やテキスト型データの計量的内容分析を用いて客観的な分析に努め、研究の信頼性、妥当性を高めている。また考察では、先行研究や関連領域の知見を引用しながら、筋道を立てて論考を進めている。論の運び方は明快であり、得られた結果から、合理的な結論を導くことができている。

(4) 教育実践学の学位論文としての独創性及び発展性について

日々子どもを見ている保育関係者は、経験的に子どもの表現の融合について知っている。研究の重要性は認識されながら、研究が推進されなかった理由は、造形と音楽の両分野を扱う難易度が高いからであると指摘できる。本論は、そのような先行研究の蓄積が少ない複合領域を研究対象として、現職保育者に対する広範囲の質問紙調査によって保育実践の在り方を検討しており、教育実践学の観点から独創性・先進性のある研究であると言える。さらには、今後の研究の発展が期待される内容である。

(5) 学位に学校教育学を付記する根拠としての学校教育実践への貢献について

幼児期の子どもの表現は未分化な部分が多く、本来は表現の結び付きが起きるのは自然であるが、これまでの幼児教育・保育がそれを明確に捕捉できず、保育実践研究も十分ではなかった。したがって今後、複数表現領域を結び付けた表現活動が望まれる状況において、本論によって解明された造形と音楽の結び付きを取り入れた保育実践の構想は、新しい保育実践のモデルや研究の理論的裏付けを与えるものである。この点において、学校教育実践へ貢献する成果と認められ、学校教育学の推進とその方法の確立に寄与する論文と言える。

3. 審査結果

以上により本審査委員会は、高橋慧の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。